

十六世紀日本の都市図——宋代の都市図との関係

佐藤 康 宏

一、十二・十三世紀の絵巻に描かれた京都

「第十世紀至十六世紀山水畫在東亞的發展」(十世紀から十六世紀までの東アジアにおける山水畫の展開)というテーマは、私にはとてもむつかし過ぎますので、きょうは十六世紀の日本で制作された都市図についてお話しします。都市を描く絵画を山水畫のひとつの発展したかたちと考えていただきたいと思います。また、日本のこの時代の都市図が、中国の宋代の都市図と関係して作られたのではないかという観点を強調することにします。ただし、何かきちんとした証明がなされるわけではありません。大部分は仮説にとどまる内容ですが、私の話が東アジア絵画の風景描写を考えるための材料に少しでもなれば幸いです。

最初に、ごくかんたんに、十二世紀と十三世紀の京都を描く作例に触れておきましょう。十六世紀に登場した都市図がどれほど画期的なものだったかを理解していただくためには必要な前提だろうと思います。

京都の町を描く絵画は、遅くとも十二世紀後半には作られていたことが、いくつかの絵巻によってわかります。図1は「信貴山縁起」(朝護

孫子寺)のうち、天皇のいる宮廷の門のあたりを描くところです。天皇は重い病気にかかっているようで、その治癒を祈るために僧侶がいま門を入ろうとしています。このように京の都を描くといつても、あくまでも説話の舞台として取り上げられているわけです。十二世紀の日本の絵巻は、そのころまでの東アジアの説話画を考える上で貴重な遺品だと思えますし、何よりもおそらく魅力的です。ただ、都市の表象という点では、それに先立つ張擇端の「清明上河図」(北京故宮博物院)のようなヴィジョンとはかけ離れていて、広い範囲の都市を連続的に把握しようとはしません。図2の「伴大納言絵巻」(出光美術館)でも、宮廷の門が火事になったのを見ようとして駆けつけて来る群衆の方が主役であって、建造物はその舞台です。右端には舞台によし登る役者もおります。「病草紙」という絵巻も全体の三分の一近くははつきり京都のできごとを描いています。図3の「肥満の女」(福岡市美術館)はそのひとつです。金貸しで稼いで金持ちになり、おいしいものを食べ過ぎて、自分ひとりでは歩くのも困難なほど太ってしまった——そんな女が住んでいたのは

